

Better visual outcome associated with early vitrectomy in the management of endophthalmitis

Sarah Welch, Riyaz Bhikoo, Nancy Wang, Martin J Siemerink, William Shew, Philip J Polkinghorne, Rachael L Niederer

Br J Ophthalmol. 2022 Aug;106(8):1145-1149. doi: 10.1136/bjophthalmol-2020-316846.

感染性眼内炎は緊急性の高い予後不良な疾患あり、治療として抗生剤の硝子体注射や硝子体手術が行われます。眼内炎の治療指針としては、Endophthalmitis Vitrectomy Study (EVS) で、早期の硝子体手術と抗生剤の硝子体注射では視力予後に有意な差がなかったことが根拠になってきました。しかし、EVS は 1990 年代の研究であり、昨今の硝子体手術の進歩は考慮されていません。そこで、ニュージーランドの Welch らは 2006 年から 2019 年に経験した眼内炎の 290 例について後ろ向きに検討しました。290 例のうち前房穿刺と硝子体注射を施行したのが 192 例 (66.2%)、早期の硝子体手術を施行したのが 98 例 (33.8%) でした。硝子体注射を選択された 192 例のうち 89 例は二次的に硝子体手術が施行されました。結果的に 24 時間以内に硝子体手術が行われたのが 82 例で、24 時間以降が 105 例でした。筆者らは、多変量解析において 24 時間以内の硝子体手術が良好な視力予後に関与することを示しました。同時に、予後不良因子として若年、男性、初診時矯正視力不良が同定されました。しかし、早期硝子体手術とそれ以外の硝子体手術の群の単純な比較では、有意差を見出すには至っておりません。本研究の limitation として、後ろ向き研究であり、初診時所見がより重症な症例に早期硝子体手術が選択されやすい傾向があるとしています。また、24 時間以降の群には硝子体注射で効果不十分な症例も加わるため、単純な比較は難しいと考えられます。他の報告では、Kitsche らは抗生剤硝子体注射を選択された眼内炎の 85% が追加の治療が必要であった一方、最初に硝子体手術を施行した症例では 45% にとどまったとしています。また、Kung らは早期の硝子体手術は視力予後の改善に関与するとしています。その他の小規模の研究でも、本研究と同じように眼内炎に対する早期硝子体手術の有効性が報告されています。眼内炎は稀な疾患であり、後ろ向き研究ではありますが 290 例を含む解析の報告は意義深いものと考えます。(担当者： 横浜市立大学 竹内 正樹)